

—平城宮跡歴史公園の利用実態から—

はじめに 平城宮跡における学校団体の利用が昨年度に比して、県内の利用が増加した。コロナ禍での県外への移動自粛と、改訂された教科書副読本に平城宮跡が取り上げられたことが来園動機として挙げられる。また、学校団体に限らない利用実態調査からは、幅広い年代で平城宮跡に「史跡見学・歴史学習」を期待していることが判明した。また、学校利用に際しては、ハンズオン展示の中止が求められる中、従来のハンズオン展示を活かした学習シートが改めて有効であることが秋季の来館者調査からわかった。

コロナ禍での来園目的「史跡見学・歴史学習」 2020年は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の自粛の影響により従来の来園者数は勿論のこと、来園者の居住地にも変化が認められた。国土交通省が令和2年度春季・秋季と実施した利用実態調査結果によると¹⁾、春季調査では、「散歩」を目的とした来園者が50.3%、次いで「史跡見学・歴史学習」が39.3%、「風景を楽しむ」が24.5%であった。遠出の外出を自粛し、近場で時間を過ごす人が増えたことに起因する。一方、秋季には、自粛や遠方への移動が緩和した影響で関西以遠の居住者の来園が増加傾向にあった。「史跡見学・歴史学習」を目的とする来園者の居住地別の割合は、県内・関西圏内で約3割なのに対し、関西以遠では約5割であったことが特徴的である(図79)。また、自粛前後のいずれの時季も、「史跡見学・歴史学習」が上位にあがっていることが注目値する。アンケート調査の対象者の年齢は、小学生から70歳以上で構成され、60歳以上の回答者は約48%を占めているが、幅広い年代で「史跡見学・歴史学習」のニーズがあることが改めてわかった。

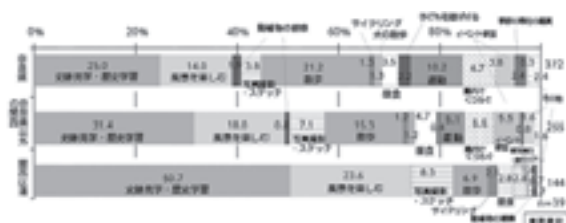


図79 2020年度秋季における来園者の居住地別来園目的

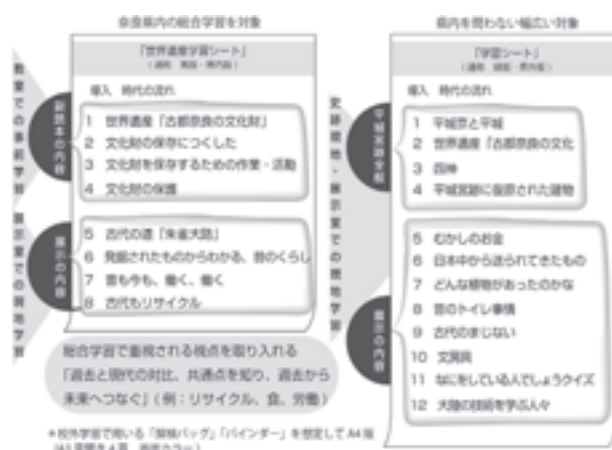
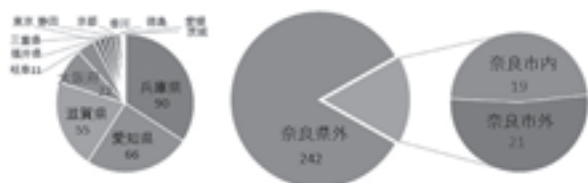


図80 学習シートの構成（県内総合学習用・県外展示学習用）

「平城宮跡」教育旅行誘致と学習シート 2019年度の教育旅行の分析²⁾では、平城宮跡いざない館来館団体のうち、大阪府、滋賀県、兵庫県が276校と全体の80%を占めるにも関わらず、奈良県内の利用はわずか2%と県内利用の少なさが課題であった。そのため、教育旅行誘致策の一つとして、奈良市・奈良県の各教育委員会の協力を得て、平城宮跡管理センターと「平城宮いざない館学習シート」を制作し、奈良県内の小学校への配布を計画した。これについては、2020年4月に施行となる新学習指導要領にもとづいて改訂される奈良県内小学校社会科副読本『奈良県の暮らし』に、平城宮跡が大きく取り上げられたことを念頭に置いた。

学習シートは、奈良県内での総合学習を意識した内容の青版（「世界遺産学習シート」）と、県外からの教育旅行を主な対象とし、歴史学習と関連付けつつ、楽しみながら展示を理解できる内容の緑版（「学習シート」）の2種類を制作した(図80)。自粛が緩和された秋季以降、本格的に配布・利用開始し、約2000部が実際に活用された。バスの利用からみた団体受付と合わせて確認すると、2019年度は奈良県内の利用が9校³⁾であったが、県内40校（奈良市内19校、市外21校）となり³⁾、結果的に県外への移動自粛の影響によって、県内利用校が増加する現象に転じた(図81)。また、県内小学校の引率する教員の話によると、今年度改訂された副読本に平城宮跡が取り上げられ



奈良県内利用の割合が増加（2020年10・11月のバス・団体予約利用から）

図81 平城宮跡歴史公園へ来園する学校団体の都道府県別の利用状況



図82 展示室で学習シートを利用する様子(左:学習シート2種 中央:和同開珎の形状を観察する 右:展示内で学んだことを解答する)

ていたからという来訪理由もあり、利用増加に功を奏した結果となった⁴⁾。

ハンズオン展示の中止—ハンズオフ展示の活用 ハンズオン展示は、その名の通り、手で触れ五感を刺激することでモノの情報を来館者の記憶に定着させる効果を狙った展示であり、国内でその手法が定着・浸透して久しい。しかし、昨今の感染症予防策として中止を余儀なくされている施設が大半である。例に漏れず、いざない館のハンズオン展示も当面中止している。では、触れない従来の展示であるハンズオフ展示を如何にして活用するか。2019年度の学習シートの制作段階にはこうした事態を想定していなかったが、手で展示物に触れずとも、観覧しながら「探す・観察する・描く・解く」という体験を通じて記憶に残すことができるワークシートというツールは、コロナ禍においても非常に有益であることが以下の調査からわかった。

行動調査にみる利用パターンとその効果 展示評価の一環として、年代・利用目的・性別を問わず幅広い対象者の観覧行動の事例収集のため、平城宮跡の人出が最も増える秋の行楽シーズンに来館者行動調査を実施した。中でもここでは、学校団体の動向について触れる。

学習シートを実際に使用していた学年は、主に小学4・5・6年で、総合学習や社会・歴史学習を開始する学年に相当する。小人数の班行動が多く、各班で自由に展示を巡り、シートの問いに沿って展示資料や解説パネルを丁寧に読み解こうとする姿が各所でみられ、普段なら注視しないであろう考古遺物を入念に観察し、スケッチする様子がうかがえた(図82中央・右)。

各学校が用いていたツールには、以下の3パターンが確認できた。①学習シートを持参しそのまま利用、②学習シートをダウンロードし、教員が気に入った内容を切り貼りして、オリジナルしおりを持参、③筆記用具もシートも持たず、タブレット端末のみを持参する、というものだ。このうち、①・②と③では滞在時間、観覧動線に明確な差が認められ、シートを利用しながら観覧す

る①・②は、「時間が足りない」や「まだ探したい」などの児童の声があり、自発的に万遍なく展示室を巡り観覧する行為を促していることがわかる。③については、タブレットでひとしきりスナップを取り終えたら、展示室内を周遊し、廊下の休憩スペースで時間を持て余す児童が複数見受けられた。オーソドックスなツールではあるが、児童が主体的に動き、自分なりの気づきや感動を得ている様子が印象的であった。

まとめ コロナ禍という未曾有の状況下であっても、幅広い年代が「史跡見学・歴史学習」を求めて平城宮跡に訪れていることがわかった。そうした目的を持たない若者世代やニッチなニーズに焦点を当てて新規開拓を模索する方向も必要ではあろうが、今回のコロナ禍を契機として改めて、幅広い年代の来訪者のニーズに沿った情報・サービスの提供が肝要であることを認識した。「史跡見学・歴史学習」の対象者の要ともいえる学校への働きかけは必須である。今回は、児童の主体的な学びを支援する展示活用法の一つであるワークシートが有益であることを再確認した。今後は、余暇を生涯学習に勤しむ世代へのニーズにも応えていくことが求められよう。各世代の行動を精査し、対象に応じた「学び」について再考することが引き続き課題として挙げられる。

本報告はJSPS科研費JP20K13257の成果を一部含む。

(廣瀬智子)

註

- 1) 国土交通省近畿整備局国営飛鳥歴史公園事務所(以下、国交省)が実施した平城宮跡歴史公園利用実態調査の春季調査(令和2年6月5～8日)、秋季調査(同年11月6、8、12、14日)の結果に基づく。データ提供にあたっては、国交省の宇川裕亮氏、平城宮跡管理センターの中井健二氏よりご快諾いただいた。
- 2) 平城宮跡管理センターの2019年度の分析による。
- 3) 奈良市以外の県外市町村は以下の通りである。生駒市、河合町、桜井市、香芝市、三宅町、下市町、平群町、広陵町、宇陀市、田原本町。
- 4) 昨年度、校外学習のテキストとして利用率の高い副読本に平城宮跡が大々的に取り上げられたことで、次年度以降の利用増加を見込んでいたが、予想を上回る状況となった。